

JENESYS2025 日本・ASEAN 学生会議の記録 (招へいプログラム)

1. プログラム概要

【目的】このプログラムは、日本とASEAN諸国^(注)の青年が、日ASEAN関係について学習し、アジア地域に共通する課題についての認識を共有し、課題解決に向けた意見交換を通じて、(1)自らが持つ能力や可能性に気づき、社会貢献の醸成を図ること、(2)文化の多様性を認め合いつつ相互理解を促進すること、(3)参加各国の青年の友好・協力ネットワークを強化することを目的として実施しました。

(注) ASEAN 諸国：インドネシア、カンボジア、シンガポール、タイ、東ティモール、フィリピン、ブルネイ、ベトナム、マレーシア、ミャンマー、ラオス

【概要】2026年1月13日から20日まで、「日本・ASEAN 学生会議」(1月17日～19日、於：東京)に出席するためにASEAN諸国の大学生76名が来日しました。一行は、学生会議の開催に先立ち、学生会議のテーマ別に3つのグループに分かれ、「気候変動・防災」グループは広島県、「教育・デジタル技術」グループは三重県、「スタートアップ・国際連携」は栃木県を訪問し、テーマに関する講義、視察を通じて日本の事例を学びました。また、ホームステイや訪問地の文化を体験し、日本の魅力についてSNSを通じて発信しました。学生会議では、日本人大学生7名も参加して各テーマについて議論を交わし、課題解決に向けて自分達若者ができることを考え、最終日の報告会ではアクション・プラン(帰国後の活動計画)を発表しました。

【参加者】ASEAN 諸国及び日本の大学生 合計 83 名

(内訳) インドネシア7名、カンボジア7名、シンガポール7名、タイ7名、東ティモール7名、フィリピン7名、ブルネイ7名、ベトナム6名、マレーシア7名、ミャンマー7名、ラオス7名、日本7名

【訪問地】東京都76名、広島県24名、三重県26名、栃木県26名

【日程】

■ プレプログラム (オンライン事前学習) :

1月6日(火曜日) 【来日前オリエンテーション】【参加者間交流】
来日までの指定期間 【課題学習(動画配信)】「事前オリエンテーション」「南三陸町からのメッセージ」「日本語」

■ 招へいプログラム :

1月13日(火曜日) 成田国際空港及び羽田空港より入国
【来日時オリエンテーション】
【表敬訪問】大西 洋平 外務大臣政務官
1月14日(水曜日) 【基調講演】「不確実な世界における日ASEANの共創 — JENESYS2025 日本ASEAN 学生会議—」

講師：国際機関日本アセアンセンター（AJC）平林 国彦 事務総長

3つのグループにわかれ、都内での視察後、移動。

- 「気候変動・防災」グループ
【視察】気象庁
- 「教育・デジタル技術」グループ
【視察】聖徳学園高等学校データサイエンスコース
- 「スタートアップ・国際連携」グループ
【視察】Tokyo Innovation Base（TIB）

1月15日（木曜日）～1月16日（金曜日）

- 「気候変動・防災」グループ（広島県）
【表敬訪問】広島市危機管理室 塩谷 則夫 担当局長
【視察】広島市豪雨災害伝承館
【視察】広島平和記念資料館
【ホームステイ】山県郡安芸太田町

- 「教育・デジタル技術」グループ（三重県）
【表敬訪問・講義】「三重県概要」

講師：三重県政策企画部国際戦略・プロモーション推進課 前田 靖朋 係長

「三重県の情報通信技術（ICT）教育における取り組みと変遷」

講師：三重県教育委員会 高校教育課 中村 圭吾 充指導主事

【テーマ関連視察】鳥羽商船高等専門学校

【ホームステイ】度会郡大紀町

- 「スタートアップ・国際連携」グループ（栃木県）
【表敬訪問】宇都宮市 経済部 産業政策課
【表敬訪問】栃木県 産業労働観光部 経営支援課
【テーマ関連視察】NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク
【ホームステイ】大田原市

1月17日（土曜日） 訪問地から東京都へ移動

学生会議1日目【全体オリエンテーション】【テーマ別講義・討論】

- 「気候変動・防災」グループ
【講義】「気候変動対策と開発」 講師：公益財団法人地球環境戦略研究機関（IGES） 戦略マネジメントオフィス 松尾 直樹 上席研究員
- 「教育・デジタル技術」グループ
【講義】「教育×デジタル技術の現状と課題（世界的な教育のデジタル化と日本・東南アジアでの動向）」 講師：聖徳学園中学・高等学校 ドウラゴ 英理花 校長補佐・データサイエンス部長
- 「スタートアップ・国際連携」グループ
【講義】「創造的で社会的意義のあるビジネスを通じた、アジアと日本をつなぐ架け橋」

講師：一橋大学 米倉 誠一郎 名誉教授

1月18日（日曜日） 学生会議2日目【グループ別討論会】

1月19日（月曜日） 学生会議3日目【グループ別討論会】、【ワークショップ】 訪日成果のまとめ、アクション・プランの作成、【報告会】

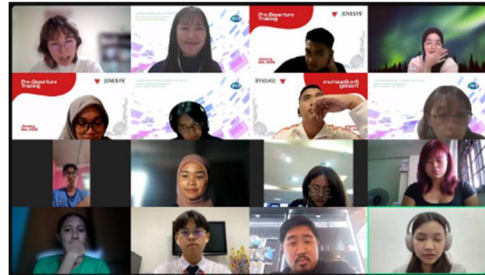
1月20日(火曜日) 成田国際空港及び羽田空港より出国

2. 記録写真

■ プレプログラム (オンライン事前学習)



2026年1月6日【来日前オリエンテーション】



2026年1月6日【参加者間交流】

■ 招へいプログラム

・グループ共通 (東京都)



2026年1月13日【表敬訪問】記念撮影 (写真提供: 外務省)

https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/release/pressit_000001_03206.html



2026年1月13日【表敬訪問】

大西 洋平 外務大臣政務官 (写真提供: 外務省)



2026年1月14日【基調講演】

「不確実な世界における日ASEANの共創
— JENESYS2025 日本ASEAN学生会議 —」

・「気候変動・防災」グループ (広島県)



2026年1月14日【視察】



2026年1月15日【表敬訪問】

<p>気象庁総務部企画課国際室</p>	<p>広島市危機管理室 塩谷 則夫 担当局長</p>
	
<p>2026年1月15日【視察】広島市豪雨災害伝承館 ・「教育・デジタル技術」グループ（三重県）</p>	<p>2026年1月16日【視察】広島平和記念資料館</p>
	
<p>2026年1月14日【視察】 聖徳学園高等学校データサイエンスコース</p>	<p>2026年1月14日【視察】 聖徳学園高等学校データサイエンスコース</p>
	
<p>2026年1月15日【講義】 三重県国際戦略課、三重県教育委員会</p>	<p>2026年1月15日【テーマ関連視察】 鳥羽商船高等専門学校</p>
<p>・「スタートアップ・国際連携」グループ（栃木県）</p>	
	

<p>2026年1月14日【視察】 Tokyo Innovation Base (TIB)</p>	<p>2026年1月15日【表敬訪問】 宇都宮市 経済部 産業政策課</p>
	
<p>2026年1月15日【表敬訪問】 栃木県 産業労働観光部 経営支援課</p>	<p>2026年1月15日【テーマ関連視察】 NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク</p>
<p>・ホームステイ</p>	
	
<p>2026年1月16日【ホームステイ】 広島県 山県郡安芸太田町</p>	<p>2026年1月16日【ホームステイ】 三重県 度会郡大紀町</p>
	
<p>2026年1月16日【ホームステイ】 栃木県 大田原市</p>	<p>2026年1月16日【ホストファミリー—歓送会】 三重県 度会郡大紀町</p>
<p>・日本・ASEAN 学生会議（東京都）</p>	
	
<p>2026年1月17日【講義】</p>	<p>2026年1月17日【講義】</p>

<p>「気候変動対策と開発」</p>	<p>「教育×デジタル技術の現状と課題(世界的な教育のデジタル化と日本・東南アジアでの動向)」</p>
	
<p>2026年1月17日【講義】 「創造的で社会的意義のあるビジネスを通じた、アジアと日本をつなぐ架け橋」</p>	<p>2026年1月18日【グループ別討論会】</p>
	
<p>2026年1月19日【ワークショップ】</p>	<p>2026年1月19日【報告会】</p>

3. 参加者の感想（抜粋）

◆ ブルネイ 大学生

Tokyo Innovation Base (TIB) のコンセプトには非常に感銘を受けました。スタートアップや国内外の人々がこの施設を活用し、ネットワーキング、ピッチ、製品展示、会議、イベント開催などが行える点が魅力的です。さらに TIB は、スタートアップ向けに 3D プリンターやレーザープリンターなどの設備を、会員が無料で利用できる形で提供しており、製品開発や研究にかかる費用を大幅に削減できます。もしこのようなコンセプトが私の母国ブルネイでも導入されれば、研究開発における財政的リスクを軽減することで起業時の失敗への恐怖心を軽減し、大きなチャンスとなるはずです。

◆ カンボジア 大学生

交流プログラムでは、文化交流、学問的成長、専門的知見、そして人脈構築の機会に特に感銘を受けました。多様な背景を持つ仲間との出会いは私の世界観を広げ、異なる視点への理解を深めてくれました。新しい教育スタイルや協働プロジェクトの経験を通して、理論を現実の課題と結び付けて考察する視点を養うことができました。

◆ インドネシア 大学生

ホームステイとホストファミリーは、本当に素晴らしく、新しい発見に満ちた経験で、非常に印象的でした。現地の文化や日常生活に直接浸ることができたことは非常に有意義で、ホストファミリーの温かいおもてなしのおかげで、まるで第二の故郷にいるような感覚でした。伝統的な食事を共にしたり、地元の習慣を学んだりするといった、他の場所では得られなかったあらゆる瞬間が、訪日の

深みを増してくれました。この経験は、日本への理解と敬意をさらに深めるものでした。今後も何度も訪れ、さらに深く探求したいと強く思うようになりました。

◆ **ラオス 大学生**

最も印象的だったのは、日本がイノベーション、教育、社会的包括性をとても実践的かつ協調的な方法で統合していることです。企業訪問や講義を通じて、イノベーションとは技術だけでなく、知識、経験、そしてセクター横断的な協力によって新たな価値を創造することでもあると学びました。このプログラムを通して、政府、大学、コミュニティが支える強力なエコシステムが、社会課題をいかにチャンスに転換できるかということ学ぶことができ、これは自国でも応用できる貴重な知見となりました。

◆ **マレーシア 大学生**

最も印象的だったのは、学校交流や企業訪問を通じて、さまざまな学術的・職業的環境を直接体験できたことです。学生や教育者、業界の専門家と直接交流することで、理論がどのように実際の現場で応用されているかをより深く理解することができました。特に、革新的な教育手法、チームワーク文化、問題解決アプローチなどを知ることができたのは大きな収穫でした。

企業訪問はとりわけ印象的で、組織がテクノロジー、効率性、規律をどのように日々の業務に取り入れているかを目の当たりにしました。

全体として、この経験は私のグローバルな視野を広げ、コミュニケーション能力を高め、今後の学業やキャリアについてより批判的かつ深く考えるきっかけを与えてくれました。

◆ **ミャンマー 大学生**

最も印象的だったのは、日本の学校や大学を訪問し、その教育現場を直接観察する機会を得たことです。特に生徒や先生が示す強い規律意識、チームワーク、互いに対する敬意に感銘を受けました。これらの訪問で日本の教育システムに対する貴重な知見を得ることができ、学業やキャリアにおいてその価値観や実践を活かしていこうと思いました。

アクション・プランの実施に加え、同窓会ネットワークやオンラインコミュニケーションプラットフォームを通じて、参加者同士との積極的なつながりを維持する予定です。小規模な同窓会やオンラインミーティングを企画し、近況報告や意見交換を行うとともに、教育とデジタル技術に関連する協力活動の実現可能性について議論したいと考えています。

◆ **フィリピン 大学生**

地方での生活は、都会とは大きく異なっていました。夜は非常に静かで平穏で、道路を走る車もまばらでした。都会のように賑やかな通りもなく、通勤や帰宅で人通りが多いこともありません。ホストファミリーは我々を家族のように接してくれ、この経験は生涯忘れられない大切な思い出になるでしょう。

◆ **シンガポール 大学生**

広島市豪雨災害伝承館を訪れ、災害が発生した当時の状況や地域に与えた影響、そしてその後に行われた被害軽減のための対策について学ぶことができました。また、土木工学を専攻する学部生として、実際に設置されている砂防ダムなどの構造物を見ることで、これまでに学んできた知識を現実の構造物と結び付けて理解することができました。

◆ **タイ 大学生**

ASEAN 各国及び日本から参加した、同じ関心を持つ他の参加者の皆さんとつながることができたため、一つの問題でもさまざまな視点から捉えることができました。参加者や講師の方々と知識を

共有するようなセッションが多くあり、非常に感銘を受けました。

◆ **東ティモール 大学生**

広島を訪れたことで、原子爆弾投下がもたらした歴史的な影響や、人類に与えた長期的な影響について深く理解することができました。平和記念資料館や関連施設を見学する中で、平和の大切さや人々の強い思い、そして同じ悲劇を繰り返さないために歴史を学び続ける重要性を強く感じました。この経験を通して、世界に対する責任や平和構築、国際協力の意義について改めて考えるきっかけとなりました。

また、講義では、日本の戦後の発展や文化、国際社会における日本の役割について学ぶことができました。講師の方々からは、歴史的な内容だけでなく、現代社会に関するお話も聞くことができ、過去の出来事と現在の世界的な課題を結び付けて考えることができました。広島訪問と講義の両方を通して、日本が大切にしている価値観への理解が深まり、今後は異文化交流や国際社会に積極的に貢献していきたいという気持ちがより強くなりました。

4. **受入れ側の感想（抜粋）**

◆ **ホストファミリー**

安芸太田町の良い所（空気や水がおいしいことや何気ない風景）を、改めて訪日団が教えてくれ、学びが多かったです。これを機会に日本の文化や安芸太田町の良い所をさらに見つけていきたいと思いました。

◆ **視察先関係者**

訪日団の感想を読ませて頂き、自然災害に向き合う大切さと防災減災を理解いただけた事に感謝しております。各国、災害時の対応が違う中、少しでも防災、減災の考え方を持ち帰っていただき、お役にたてて頂ければありがたいです。皆さんからの核心をつく質問を受け、色々な事を吸収しようとしている姿勢に感動しました。

◆ **講師**

ASEAN 諸国の次世代を担う「選ばれし生徒」と交流できたことは、私にとって大きな喜びでした。何より印象的だったのは、参加者の皆さんの志の高さです。講義や日本の学生との交流において、積極的に質問を投げかけ、真摯に議論を深めようとする姿勢には、目を見張るものがありました。異なる背景を持ちながらも、互いの文化を尊重し、高め合う姿に、日本と ASEAN が共に歩む明るい未来を確信いたしました。

この交流で得た知見や、国境を越えて築いた絆は、参加者の皆さんにとって一生の財産となるはずです。どうか今回の成果を自国に持ち帰り、科学、文化、社会貢献、教育など、それぞれの専門分野で存分に活かしていただければ幸いです。参加者の皆さんが、世界をつなぐ架け橋として飛躍し、いつかまた、成長した姿で再会できる日を心より楽しみにしています。

5. 参加者の対外発信（抜粋）、報道記事等

	
<p>2026年1月14日 (Instagram) フィリピン 大学生 2日目はとても学びの多い一日でした。 日本アセアンセンターで一日をスタートし、差し迫った課題に取り組むこと、そして変革の担い手として私たちに求められる役割について貴重なお話をいただきました。その際、日本の関係構築における取り組みをベンチマークとして参考にしました。 次に、行政支援のスタートアップサポート施設「Tokyo Innovation Base」を視察しました。そして一日の締めくくりに、数時間かけて栃木へ移動。まるでPinterestから抜け出したような風景の土地で、これから始まる活動に備えました。実り多い一日を感謝しています。</p>	<p>2026年1月15日 (Instagram) シンガポール 大学生 日本アセアンセンターで行われた対話セッションでは、ASEAN11か国の若者が懸念する課題と、地域社会におけるASEANの結束の役割について話し合いました。 これには雇用への不安やASEANにおける平和の脆弱性も含まれていました。</p>
	
<p>2026年1月17日 (Facebook) ミャンマー 大学生</p>	<p>2026年1月19日 (Instagram) マレーシア 大学生</p>

私たちのチームは、「もったいない」という日本の精神に共感する ASEAN 学生と日本人学生のユニークな協働によって成り立っています。

多様な地域の視点と実践的なリサイクル活動を組み合わせることで、私たちはキャンパスコミュニティの中に持続可能な循環型経済を築いていくことを目指しています。

一緒に「廃棄物」を「行動」へと変えていきましょう。



2026 年 1 月 29 日（鳥羽商船高等専門学校のウェブサイト）

「JENESYS2025 日本・ASEAN 学生会議の参加者が本校を視察に訪れました」

今回、本校を訪れたグループは、「教育・デジタル技術」をテーマとしており、日本の先進的な取り組み事例として、本校が推進する DX 化への取り組みや、最新鋭の技術が詰め込まれた練習船「鳥羽丸」を視察しました。

2026 年 1 月 27 日（在タイ日本国大使館の Facebook）

2026 年 1 月 13～20 日に日本において ASEAN 加盟国一行（約 80 名）とともに日本外務省の対日理解促進プログラムの JENESYS2025 「日本・ASEAN 学生会議」に参加した 7 名のタイ人学生が、1 月 20 日に無事にタイに帰国しました。「気候変動・防災」、「教育・デジタル技術」、及び「スタートアップ・国際連携」の 3 つのテーマでグループに分かれ、各テーマに関する様々な活動に取り組んだほか、外務省表敬、国際機関の日本 ASEAN センターの講義聴講、政府機関・民間企業への視察、広島県、三重県、栃木県でのホームステイなど、非常に盛りだくさんの内容でした。



gobaliga Two unforgettable days of global exchange in Taiki Toon

On January 15-16, Taiki Toon welcomed 26 university students as part of the Ministry of Foreign Affairs Japan-ASEAN Student Conference under the JENESYS 2025 program.

The students came from 11 ASEAN countries: Indonesia (4), Malaysia (1), Philippines (1), Singapore (1), Thailand (1), Brunei (1), Vietnam (1), Laos (1), Myanmar (1), Cambodia (1), and Timor-Leste (1).

As around half of the participants were Muslim, three out of six local homestay families kindly provided halal-friendly meals. It was truly meaningful to learn about food diversity together with our homestay hosts.

During their stay, students experienced various aspects of Japanese culture—preparing meals with a mentor and partner, wearing kimono, crafting tokonochi chopsticks, and making traditional torii decorations.

On the 16th, a farewell gathering was held in the evening at Taiki Toon Convention Hall. Hot pot (nabe) was prepared, and the stage featured Japanese taiko drumming, songs, and lively performances.

The atmosphere peaked with the traditional "karakusa" dance, bringing smiles and laughter all around.

The final moments were filled with emotion—tears, hugs, and heartfelt goodbyes.

We sincerely hope to meet again someday.

I also met 2 Indonesian delegation, they are so young with bright future. I wish all the best for their journey.

2026年1月17日（大紀町観光協会 Go Taiki GO のInstagram）

1月15～16日、外務省のJENESYS 2025 プログラムの一環で開催された「日本・ASEAN 学生会議」に参加する26名の大学生を、大紀町にお迎えしました。

参加者の約半数がムスリムであったため、6軒のうち3軒のホームステイ先がハラール対応のお食事を提供していただきました。

食の多様性について、ホストファミリーと一緒に学ぶ貴重な時間となりました。

滞在中、学生たちは杵と臼での餅つき、着物の着付け、檜の箸づくり、水引細工づくりなど、日本文化を体験しました。

16日の夜には、ホストファミリー歓送会が開催されました。

ハラール認証の食事が用意され、舞台では和太鼓、歌、にぎやかなパフォーマンスが披露されました。会場が最高潮に盛り上がったのは、伝統の「炭坑節」を踊ったとき。笑顔と笑い声があふれました。最後は涙、ハグ、そして心のこもったお別れの言葉で、胸が熱くなる時間でした。

またいつか再会できることを心から願っています。

Embassy of Japan in Laos ສາທາລະນະລັດລາວ ສົມມາທິປະໄຕ ສາມາດສາມາດ

Thailand (1), Brunei (1), Vietnam (1), Laos (1), Myanmar (1), Cambodia (1), and Timor-Leste (1).

As around half of the participants were Muslim, three out of six local homestay families kindly provided halal-friendly meals. It was truly meaningful to learn about food diversity together with our homestay hosts.

During their stay, students experienced various aspects of Japanese culture—preparing meals with a mentor and partner, wearing kimono, crafting tokonochi chopsticks, and making traditional torii decorations.

On the 16th, a farewell gathering was held in the evening at Taiki Toon Convention Hall. Hot pot (nabe) was prepared, and the stage featured Japanese taiko drumming, songs, and lively performances.

The atmosphere peaked with the traditional "karakusa" dance, bringing smiles and laughter all around.

The final moments were filled with emotion—tears, hugs, and heartfelt goodbyes.

We sincerely hope to meet again someday.

I also met 2 Indonesian delegation, they are so young with bright future. I wish all the best for their journey.



2026年1月13日（在ラオス日本国大使館のFacebook）

ラオス大学生7名の代表団は、日本政府が支援する交流プログラム JENESYS の一環として、日本・ASEAN 学生会議に参加するため日本に向かっていきます。

日本・ASEAN 学生会議の主な目的は、ASEAN 各国と日本の青年たちに日と ASEAN 地域の関係について理解を深め、自身の能力と可能性を実現するため、認識の共有と交流を通じて社会貢献を促進することです。アジアに共通する問題についての意見と、文化の多様性を認め、相互理解を深めることで友好関係と協力のネットワークを強化することです。

ラオスを代表する7名の学生は、学生会議に先立ち、地方都市を訪れ、これらの問題に対処するために日本が進行している取り組みについて学び、異文化交流イベント、ワークショップ、地域の人たちとの交流を体験します。親善大使として、日本滞在中や帰国後、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）などのツールを活用することで、自身の経験、学び、知見を幅広く視聴者と共有することが期待されます。

2007年に JENESYS が設立されて以来、2400人以上のラオスの若者がこのような交流のために来日しています。

6. 報告会での訪日成果とアクション・プラン発表（抜粋）

「気候変動・防災」グループ1



【成果の発表】

「もったいない」という日本語の言葉に触発され、私たちは日々の習慣、特に食品廃棄に焦点を当てました。私たちの母国の人々は、まだ食べ残しが残ったままのゴミをよく捨てています。ここでは大学運営と学生の意識向上に基づく行動計画に注目しています。

1) 大学管理部門

大学管理部門に対し、適切な分別のための物流基盤整備、専門的な有機廃棄物処理計画の実施、そして最も重要な点として、全学生を対象に食品廃棄物管理と気候変動との関連性を教育するため、1学期単位の必修科目（合格・不合格判定あり）を導入します。これにより長期的な行動変容を促進するのがねらいです。インフラ・行動・教育の支援により、大学は食品廃棄物を効果的に削減し、持続可能性を推進できます。

2) 学生の意識向上

学生自治会を強化します。全学的な情報キャンペーンを展開し、廃棄物分別プロセスを簡素化。各学生が効果的な分別方法を具体的に理解し、自身の貢献がなぜ重要かを示します。物流の改善と明確なコミュニケーションにより、廃棄物問題を持続可能な未来へ転換します。大学は食品廃棄物の定期的な回収と適切な管理を保証すべきです。これにより埋め立て廃棄物を削減し、キャンパスで使用する有機肥料を生産できます。

学生の意識変革に向けた3つの簡便なアプローチを提案します：

① 学生主導のソーシャルメディアキャンペーン：

短編動画やインフォグラフィック、大学名を含むキャンパス用ハッシュタグを活用し、食品廃棄物やメタン排出、気候変動に関する意識向上を図ります。

② カフェテリアでの食品廃棄物の明確な分別：

カスタマイズされた食品廃棄物専用のゴミ箱を導入し、オンラインでも話題になるよう工夫します。あわせて、簡潔な表示板の設置や現場での簡易ガイダンスを実施します。また、利用者からの提案を受け付けるため、QRコード付きのフィードバックフォームも設置します。

③ インセンティブ型の表彰制度の導入：

「今月のグリーン学生」などの表彰制度を設け、積極的な参加を奨励するとともに、学生の継続的な関与を促進します。

【課題と解決策】

1) 資金調達について

最大の課題は、予算の確保です。ハイテク型の電気式コンポスターは高額であり、稼働させるためにも

多くのエネルギーを必要とします。

そこで解決策として、私たちは、低コストで参加しやすいパイロット事業として、学生グループが管理する簡易的な自然堆肥化エリアを設けることを提案します。これにより、実際に有効性を確認するための概念実証が可能となり、教育面でも活用できる「見える成果」を生み出しつつ、現実的な財政状況にも適合させることができます。

2) 行動変容への抵抗について

多くの学生は、参加はしてくれますが、一定数の学生の中には意識が低く、行動が変わりにくいことが課題となっています。こうした抵抗は、多くの場合、根強い文化的習慣、不便さを感じる気持ち、知識不足、または周囲からの影響などが原因だと考えられます。

この課題に取り組むため、私たちは以下の三つの戦略を提案します。

- ① 委員会による体系的な運用：学生自治会と連携し、綿密な計画のもと、責任を持って取り組む体制を整えます。
- ② 対象を絞った教育的アプローチ：Instagram などを活用し、取り組みの目的や必要性をわかりやすく説明し、理解を深めます。
- ③ 文化的な定着の促進：適切な廃棄方法を判断できるよう意識を育て、キャンパス内での習慣として根づかせます。

これらのアプローチによって、行動変容の課題に直接対応し、現実的な予算の範囲内で持続可能性への取り組みを着実にスタートさせることができます。

【アクション・プラン】

3 か月間のタイムライン：

1 か月目：大学の管理部門に対し、正式な提案書を提出します。

2 か月目：食品廃棄物への意識向上を目的としたソーシャルメディアキャンペーンを開始します。

3 か月目までに：最終目標である「解決策の完全な実施」と「学生の食品廃棄に関する行動の測定可能な変化」を達成できる見込みです。

3 か月目までには、提案した取り組みを大学内で一通り実施し、さらに学生の食品廃棄に関する行動に測定可能な変化を生み出すことを最終目標とします。

● 将来に向けた二つの重要な提言

1) 拡張性（スケーラビリティ）について

私たちは、大学内での実施は、あくまで本アクション・プランを試すための場に過ぎないと考えています。学生自治会との協働やゲーミフィケーションを活用し、本モデルの有効性が確認できた段階で、より大規模な機関へと拡大することを推奨します。最終的には、ASEAN 地域全体における都市レベルでの展開を目指します。

2) 早期介入の重要性について

現段階では、主に成人を対象とした行動変容を進めていますが、長期的かつ持続的な解決には、初等教育段階からの取り組みが不可欠です。廃棄物分別の習慣を小学校教育に組み込むことで、後から「再教育」する必要がなくなり、責任ある消費行動を自然に身につけた世代を育てることができます。

「気候変動・防災」グループ 2



【成果の発表】

自然災害と急速な都市化に伴う共通のリスクを踏まえ、これらのリスクに対処するための効果的な廃棄物管理の意識啓発を目的とした学生主導の運動を提案します。

【テーマ「気候変動・防災」に関する教訓と学び】

日本は、強固なシステムと先見性をもって気候リスクを管理している国だと感じました。

気象庁では、高度な監視体制と早期警報システムを通じて、科学が人命を守る重要な手段であることが示されていました。

広島市の危機管理システムは、備え・避難計画・明確なリスクコミュニケーションの重要性を改めて浮き彫りにしていました。

広島市豪雨災害伝承館は、過去の悲劇を記憶し続けることが、社会全体の責任意識を高め、地域コミュニティの回復力を強めることにつながると実感しました。

気候変動に関する講義では、効果的な気候変動に対処する行動には、国際協力と PDCA による継続的な改善が、日本と ASEAN 諸国の双方にとって不可欠であることを再確認しました。

東アジア・太平洋地域は現在、世界最大の廃棄物発生地域であり、2016 年には総量 4 億 6,800 万トンに達し、2050 年までに 7 億 1,400 万トンまで増加すると予測されています。

世界的に持続可能性への取り組みが進む一方で、多くの都市部では依然として非効率な廃棄物処理が災害リスクを高めています。特に、自然に分解されない廃棄物が水辺に堆積することで、人為的なボトルネック（詰まり）が形成され、洪水の頻度と深刻さを著しく増加させています。

こうした課題に対し、統合的な廃棄物管理と戦略的な情報発信・教育・コミュニケーション強化キャンペーンを提案し、市民行動の転換、災害影響の軽減、長期的な気候レジリエンス構築を目指します。

【アクション・プラン】

デジタル・コミュニケーション、対話型エンゲージメント、地域に根ざした対面活動を通じて、国際社会及び地域コミュニティへ知識を伝達・普及します。

1) デジタル・コミュニケーションによる知識普及

主なコミュニケーション手法として、コンテンツ企画やショート動画、インフォグラフィックを制作し、ソーシャルメディアを活用して認知度を高めます。

2) 対話型エンゲージメントと知識共有

講演者の招へい、双方向型のウェビナー、質疑応答付きの公開講座などを実施し、参加者が主体的に知識を深められる機会を提供します。

3) 地域に根ざした対面活動

地域コミュニティとの協働活動や戸別訪問を行い、得られた認知を実際の行動へとつなげます。住民

に直接メッセージを届けることで信頼性を高め、地域に根ざした行動変容を支援します。
マレーシア及びインドネシアでは、地域住民により深く働きかけるため、地域密着型の公開討論会を開催します。これは、すべての住民が安全に参加できる場を確保することを目的としています。

各国での取り組み事例

日本：環境省の「スポゴミ」は、ゴミ拾いを競技スポーツ化した取り組みで、従来は退屈な作業と捉えられていたゴミ拾いを、若者を惹きつける魅力的なイベントへと転換しました。

カンボジア：「今日はビニール袋を使わない」キャンペーンが全国的に実施され、1,100 万人以上の学生や市民が参加する大きな成果を上げました。

シンガポール：「全国ボランティア連携プログラム」が成果を上げ、2016 年から 2020 年の間に 34,000 トン以上の電子廃棄物を回収しました。

フィリピン：PNOC（フィリピン国営石油会社）主導の海岸清掃活動により多くの成果が得られ、最近の活動では 158 人のボランティアが 1,300 キログラム以上の廃棄物を回収し、環境に対する社会全体の責任意識を示しました。

「気候変動・防災」グループ 3



Action Plan				Date	Phase	Remarks
05/01-06/01				2023-2023	1	Implementation Module 1
06/01-06/01				2023-2023		Implementation Module 2
06/01-07/01	1	Preparation Period		2023-2024		Implementation Module 3
06/01-07/01				2024-2024		Implementation Module 4
06/01-06/01				2024-2025		Implementation Module 5
06/01-07/01	1	Selection: Promoting Concepts, Application Materials, Country Leader Selection, Announcement		2024-2025	1	Evaluation & Reporting Period
06/01-07/01						

【成果の発表】

<背景>

東南アジアと日本では、気候変動の影響により自然災害がかつてない速度で増加しています。洪水、熱波、土砂災害、大気汚染などは毎年数百万人の生活と健康を脅かし、とりわけ脆弱な地域社会では、防災体制や早期警報システムが十分に整備されていないことが被害を深刻化させています。こうした状況の中で、災害発生後の 72 時間は、命を守り、地域が立ち直るための最も重要な時間として位置づけられています。

<5 つの柱フレームワーク>

私たちは、最初の 72 時間が重要と考え、次の 5 つの柱に基づき、アクション・プラン「The First 72」を実施します。

1. 環境意識の向上
2. 早期警報システムの理解と普及
3. 強靱なインフラの重要性の共有
4. 政策と法執行の役割の理解
5. 国際協力と若者の相互支援

災害が「確実性」を奪う時、備えが「希望」を生みます。本アクション・プランは、ASEAN と日本の若者を主たる対象とし、情報発信に携わるデジタルクリエイターたちを副対象者として巻き込みなが

ら、最終的には地域コミュニティや学校が受益者となるように設定し、気候危機に対する認識が具体的な行動へと転換していくことを目的としています。

【アクション・プラン】

本プロジェクトは、準備・選考・学習と実施・評価の4つのフェーズで進行します。

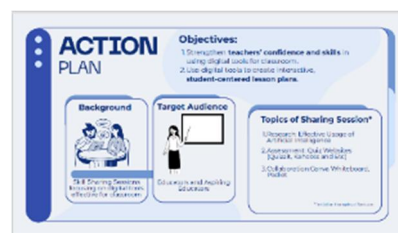
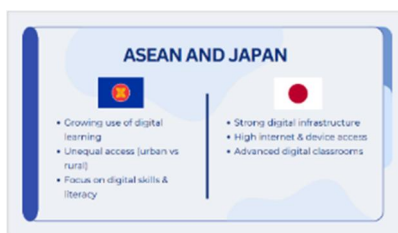
まずフェーズ0（準備）でスタッフ募集、教材作成、プロジェクト設計、SNS基盤づくりを行います。

フェーズ1（選考）で参加者を募集し、各国の応募をもとにリーダーを選出して発表します。

フェーズ2（学習と実施）では、(1) オリエンテーション、(2) 現場経験者の話を聞くヒューマンライブラリー、(3) オンライン社会運動の企画制作、(4) 発表とフィードバックの4つのモジュールを実施します。

フェーズ3（評価）で成果とインパクトを測定し、次年度への改善点を整理します。

「教育・デジタル技術」グループ1



【成果の発表】

i. デジタル教育の現状

- ・ デジタル学習の急速な拡大
- ・ 都市部と地方でのアクセス格差
- ・ 教師のデジタルスキル／リテラシー格差（例：東南アジアでは約40%がスキル不足）
- ・ デジタルインフラの充実状況の重要性
- ・ インターネット環境や端末への高いアクセス率
- ・ 先進的なデジタル教室環境の存在

ii. なぜ教育においてデジタル技術が重要なのか？

- ・ デジタルツールは学習を効果的に支援し、学習過程をより豊かにする。
- ・ オンライン学習と対面学習を組み合わせたブレンド型学習により、学習機会が広がる。
- ・ 学習の質が向上し、学習者一人ひとりに合わせた個別化が可能になる。

【アクション・プラン】

AI技術の発展に伴い、教育現場ではデジタルツールを効果的に活用するための知識と技能がますます重要になっています。そこで本アクション・プランでは、教育者及び教育を志す人を対象に、授業でデジタルツールを活用するためのスキル向上を目的とした学びの場を提供します。

テーマは大きく二つあり、まず第一に、教師がデジタルツールを授業で活用する際の自信と実践的スキルを高めること。第二に、双方向性を備えた学習者中心の授業をデジタルツールによって実現できるようにすることです。

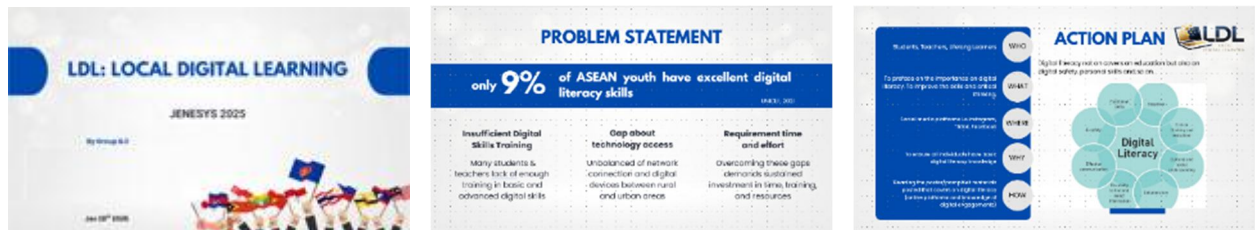
セッションの具体的な内容としては、(1) 調査のための人工知能(AI)の活用方法、(2) Quizzit や Kahoot などのクイズ作成ツールを用いた評価方法、(3) Canva ホワイトボードや Padlet といった協働学習ツ

ールの紹介を予定しています。

また、全体のスケジュールは三つのフェーズで構成されます。1月は教材作成・スキル調査・広報を行う準備期間、2月は研修及び技術サポートを提供する実行期間、3月はアンケートや効果測定を通じて改善案を作成する評価期間です。

これらの取り組みを通じて、教育現場におけるデジタル活用の質を高め、AI時代にふさわしい学習環境の実現を目指します。

「教育・デジタル技術」グループ2



【成果の発表】

i. デジタル・リテラシーの定義と意義

- デジタル・リテラシーとは、デジタル技術を通じて、情報に安全かつ適切にアクセス・管理・理解・統合・伝達・評価・創造できる能力を指す。これはコンピュータリテラシー、ICTリテラシー、情報リテラシー、メディアリテラシーなど複数の能力を含む枠組みである。(UNESCO定義が紹介されている)
- デジタル・リテラシーはより良い学習とスキル獲得、安全なデジタル環境、将来の就業機会につながる。ASEANの若者の61%は学校でデジタルスキルを学んでいないという指摘、2030年までに東南アジアの仕事の最大80%が基礎的デジタル/ICTスキルを要する見込みが示されている。

ii. 課題

- デジタルスキル研修の不足：多くの生徒・教師が基礎から応用まで十分な訓練を受けていない。
- アクセス格差：都市部と農村部、所得や年齢によるネット接続・デバイス利用の差が大きい。
- 到達度の低さ：ASEANの若者で高度なデジタル・リテラシー保有は9%のみ。
- 取り組みには継続的な時間・訓練・資源投資が必要

iii. データ分析（各地域の例）

- ベトナム：60%の教師がデジタルツールで教える知識・スキルが不十分。数学と読解で72%が基礎的な学力レベルに到達している一方で、最上位レベル（トップ層）に達するのはわずか1~5%にとどまっている。
- 日本（都道府県比較）：愛知はICT研修参加率59%、和歌山は95%。教員の授業でのICT活用力は愛媛96.7%、島根69.1%。
- インドネシア：デジタル・リテラシー指数は5段階中3.54（2022）と中位。
- 東ティモール：インターネット利用は約51%だが年齢・地域・所得で大きな差。2025年時点で人口の約65.5%がデジタル・リテラシー不足と推計。
- カンボジア：基礎的デジタルスキル保有32%、中級は5%、上級は1%。生徒の平均スコアは約49.2/100で中程度。

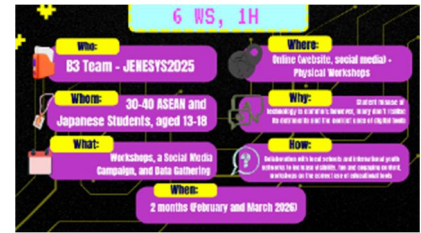
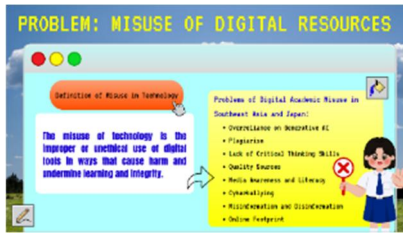
【アクション・プラン】

「デジタル・リテラシー啓発活動」

私たちのアクション・プランは、学生、教員、生涯学習者を対象に、デジタル・リテラシーの重要性を広く伝え、スキルや必要に応じて批判的に判断する力を向上させることが目的です。

デジタル・リテラシーについて説明したポスターやパンフレットを制作し、Instagram、TikTok、Facebookなどのソーシャルメディア・プラットフォームを通じて発信を行い、すべての人が基礎的なデジタル・リテラシーを身につけることを支援していきます。

「教育・デジタル技術」グループ3



【成果の発表】

i. デジタル資源の間違った使い方

- ・ テクノロジーの誤用とは、学習や誠実性を損ない、害を及ぼすような形でデジタルツールを不適切または非倫理的に使用することを指す。
- ・ 東南アジア及び日本におけるデジタル技術を用いた学術的不正行為：
 1. 生成 AI への過度な依存
 2. 剽窃（盗用）
 3. 批判的思考力の不足
 4. 情報源の質の問題
 5. メディア認識、メディアリテラシーの不足
 6. サイバー上でのいじめ
 7. 誤情報・偽情報
 8. オンライン上でデジタルフットプリントを残すこと

ii. テーマ「教育・デジタル技術」に関連する学び

●技術を「道具」として活用

- ・ 教師が iPad や大型モニターを使って授業を行っている。
- ・ 教育委員会が、教育へのテクノロジー導入に積極的に取り組んでいる。
(例：教師が生徒の回答をリアルタイムで把握・管理する仕組み)
- ・ 地域特有の課題（例：収穫・農業、漁業など）を解決するためにデジタル技術を活用。

●革新的な学び

- ・ 「デジタルと実体験（フィジカル）を組み合わせる課題を解決する学習」
- ・ 日本の DX 教育の一環として、応用的な学び（アプライド・ラーニング）を実践している。

●体験型学習（ハンズオン・ラーニング）

- ・ 1分ごとにデザイン案を描き出すことで、創造性や表現力を高めつつ、批判的思考力を鍛える。

- ・ 状況に応じて生徒が自分のデバイスを使って学ぶことを奨励している。
- ・ 教育施設や設備への投資が行われており、生徒は地域社会が直面する課題の解決策を自ら考えることが促されている。

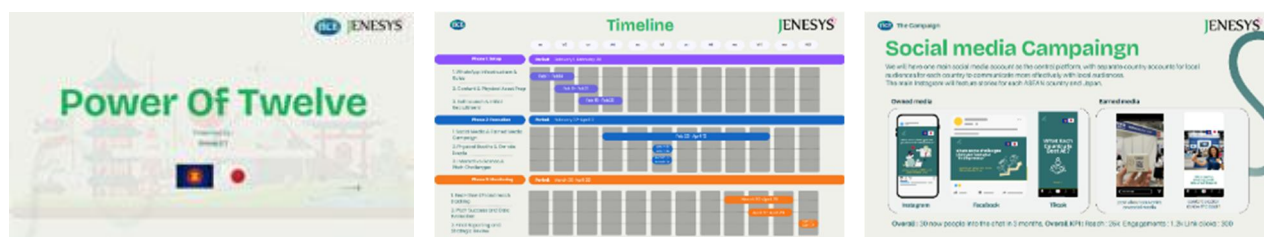
【アクション・プラン】

学生によるテクノロジーの誤用は一般的ですが、その原因はデジタルツールの正しい使い方を理解していない場合が多いため、教育用デジタルツールの正しい使い方を学ぶためのワークショップ・SNSキャンペーン、ウェブサイトの作成を実施します。

ASEAN 及び日本の 13~18 歳の学生 30~40 名を対象に、2026 年 2 月から 3 月までの 2 か月間、ワークショップはオンライン及び対面で行い、対面ではロールプレイなどを取り入れます。また、すべてのワークショップで「ミニプロジェクト」を設け、学んだ内容を教育課題に応用できるようにします。SNS キャンペーンでは、ワークショップの告知やデジタル技術に関する情報を発信し、ワークショップに参加した学生の感想なども共有します。また、ワークショップの情報、学習を補助する教材・資料、学習意欲を高める学生へのインタビュー動画などをまとめたウェブサイトをアーカイブとして機能させます。

認知度向上のため、地域の学校や国際的な若者ネットワークと連携し、参加型で楽しいコンテンツ作りを重視します。

「スタートアップ・国際連携」グループ 1



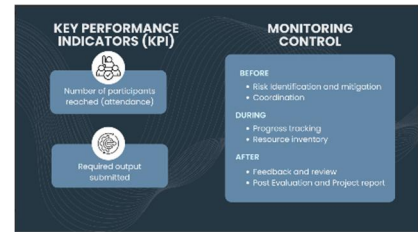
【成果の発表】

- ・ とちぎユースサポーターズネットワークでは、現実の課題に焦点を当て、満たされていないニーズを見て独自の市場を創るということを学びました。
- ・ テーマ別講義では、複数の人が協力することにより、単なる足し算以上の成果が生まれることが多いことを学びました。

【アクション・プラン】

- ・ グループ全員で国際起業家ネットワークを設立します。これは、ASEAN 及び日本の若者による「ビッグ・アイデア」実現のために必要なリソース、支援、つながりを見つけられるという、意欲的な若い起業家に向けたワンストップ・チャンネルです。
- ・ ネットワークの中心となるプラットフォームとして、メインとなるソーシャルメディア・アカウントを作ります。さらに各国の視聴者がより効果的にコミュニケーションをとるために、国別のアカウントも用意します。
- ・ ネットワークへの参加を促進するプロモーション・イベントを開催します。大学などでのブース出展を企画・運営し、起業家ネットワークの拡大を目指します。

「スタートアップ・国際連携」グループ2



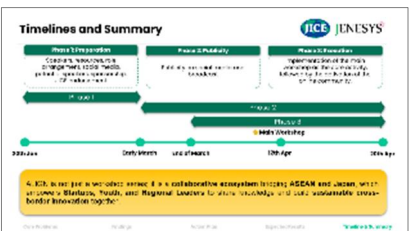
【成果の発表】

- ・ 政府による政策支援や環境整備を通じた支援がスタートアップの成功に大きく寄与し、官民の協体制がスタートアップ・エコシステム全体を強化し、より大きな社会的価値を生み出すことを学びました。
- ・ スタートアップには、「規律・革新性・長期的な計画」が非常に重要であり、サプライチェーン管理の知識やデジタル技術の活用などは、現代のスタートアップにとって不可欠な要素であることを理解しました。
- ・ 社会課題の解決を目指す社会ビジネスの視点や、ASEAN と日本の関係・協力の可能性についても学び、地域間連携がイノベーションの促進につながるということがより強く感じられました。

【アクション・プラン】

各国間で中小零細企業向け市場拡大戦略を実施します。その中で協力、チームワーク、グローバルな視点の認識を高めるための知識共有ワークショップを開きます。(目標、具体的な活動内容、方法、必要なリソースが異なるため、各国が独自の取り組みをします。)

「スタートアップ・国際連携」グループ3



【成果の発表】

栃木県では、社会ビジネスは経済的に持続可能でありながら、社会や地域の問題を解決しているということを学びました。

Tokyo Innovation Base では、この施設が共有されたエコシステムを通じて、アイデアと市場のギャップを埋める役割を担っていることがわかりました。

【アクション・プラン】

- ・ グループ全員で、ASEAN と日本のステークホルダーを結びつけるプラットフォームALIGN (ASEAN-Japan Linkage for Innovation & Growth Network) を設立します。これにより、コミュニケーション、知識交換、そして革新、スタートアップ、持続可能な開発における国境を越えた協力を促進します。
- ・ ASEAN と日本のスタートアップに対する取り組みをそれぞれの国で認知してもらうために、国ごとに異なるアプローチを行います。

実施団体：一般財団法人日本国際協力センター（JICE）